

地水火風 83

牧野恒一

臨界事故と電力会社の事故隠し

電力会社と原発について、とんでもないことが次々に明らかになっている。3月15日に、北陸電力の志賀原発で平成11年に想定外の臨界事故が起こっていたことが発覚し大騒ぎになったと思ったら、30日には東京電力から、福島原発でも昭和53年に似たような臨界事故が起こっていた疑いがあることが公表されたのだ。検査中に制御棒が抜け落ちて意図せぬ臨界状態になり、一時制御不能になったというのだからギョッとする。しかも、これらの事故は、いずれも組織的に隠蔽されていた。「開いた口が塞がらない」とはこのことだ。電力会社の事故やトラブルについては、これら以外にも、様々な隠蔽の実態が明らかになっている。今回は、臨界事故と電力会社の事故隠しについて考えてみたい。

【北陸電力志賀原発の臨界事故】

平成11年6月の臨界事故は、北陸電力志賀原発1号機の定期検査中に発生した。この原発では、定期検査に合わせ、原子炉停止機能の強化工事を行っており、そのための試験中に、操作ミスにより89本ある制御棒のうち3本が抜け落ちたということだ。制御棒は核反応を起こす中性子を吸収する機能を持っており、これを炉内に挿入すると中性子が吸収されて核反応が止まる。当日は工事のため全制御棒が炉内に挿入されて核反応が停止しており、その間に作業員が危険区域に入って作業を行っていた。3本の制御棒が抜け落ちたため、それらの制御棒近辺で核反応が始まってしまい、炉の一部が臨界状態になったのだ。

作業員が臨界事故に気づき、あわてて抜け落ちた制御棒を挿入しようとしたがすぐには入らず、臨界状態は15分間続いた。炉内の中性子は急増したが、幸い危険区域に入っていた作業員の被曝はなかった、と報告されている。今回、原子力技術協会が当時の状況を解析したところ、悪くすれば核分裂反応が暴走する「即発臨界」が起きていた可能性もあったということで、今更ながら愕然とさせられる。

これだけでも大変な事態だが、北陸電力では志賀原発の発電所長以下組織ぐるみでこの事故を隠蔽してしまったというのだから、極めて悪質だ。北陸電力の信用を根底から覆す行為と言ってよいだろう。

【東電福島原発の臨界事故】

30日に公表された東京電力のトラブル・事故に関する調査報告はもっと衝撃的だった。点検中に制御棒が脱落する事故が過去に3回も発生しており、そのうち1回は臨界事故だった可能性が高いというのだ。

制御棒脱落による臨界事故は、昭和53年11月に福島第1原発3号機の点検中に発生した。137本の制御棒のうち5本が引き抜け、臨界状態が7時間半も続いていたらしい。29年も前の事故であり、記録の改ざん等も行われていた模様で、詳しいことは「調査中」ということだが、判明している限りでは、日本最初の臨界事故ということになる。

また、昭和59年10月には福島第1原発2号機で、制御棒の操作ミスにより臨界状態になっている。その時格納容器内には、核反応停止中の作業のために約100人の作業員が入っていた。これらの作業員が被曝したとの報告はないが、状況としてはかなり危険だったと言わざるをえない。

これらは、いずれも報告、公表等がなされないまま隠蔽されており、データの改ざん等も行われるなど、悪質性は北陸電力に劣らない。東電の信用も地に落ちてしまった。

【何故今頃？】

今回、電力会社の過去の不正やトラブル、事故等が次々に明るみに出てきているのは、昨年秋以降、全国の電力会社で過去のデータ改ざんが次々に発覚したため、経済産業大臣から全ての電力会社に対し、3月31日までに過去の不正を徹底的に洗い出し総点検するよう指示があった（昨年11月）からだ。

この指示に基づき各電力会社が退職者などを含め7万人以上に及ぶ社内調査を行ったところ、内部告発などのきっかけにもなり、各社の奥深くに隠されていた事実（の一端？）が明るみに出てきたということのようだ。

3月30日に行われた電力12社の報告を電気事業連合会が集計した結果を見ると、今回報告された不正案件は合計309事案、10653件にのぼっている。そのうち原子力関係は98事案、459件で、件数的には火力発電や水力発電より少ない。だが、制御棒の脱落や挿入ミス等が4社の原発で19件あり、臨界事故も3件あったことなどが含まれており、水力発電所の水位データの改ざんなどとは次元が違う。

【電力会社の隠蔽は特に問題】

どんな会社や組織であっても、都合の悪いことは世間に知られたくない。できれば隠しておきたいと考えても不思議ではない。今回と同じような調査を、日本を代表する大会社12社について行えば、同じような数の不正案件が出てくる可能性もあるのではないかと。

だが、電力会社の場合はそれとは意味が違うと思う。原発を扱っているからだ。

原発は「核エネルギー」という人間が触れてはいけない（かも知れない）領域に手を出しており、万一大事故が起これば人類がこれまで経験したことのない大惨事になる可能性も秘めている。多くの人があるような不安を持ち、できれば原発に頼らずに生活したいと

考えながら、エネルギーをふんだんに使う生活から離れられない、という矛盾の中にいる。

その矛盾の原因は自らのエネルギー多消費型の生活にあるのだが、政府のエネルギー政策と電力会社のせいにして、若干の後ろめたさを感じつつ、現在の便利な生活に固執している。電力会社には、便利な生活の裏方を担ってもらっているのだが、原発というだけですっかり悪者扱いだ。電力会社は、そのような矛盾を黙って受け止めつつ、粛々と電力を供給する役割を課せられている。

原発関係で何かトラブルがあると、そんな矛盾や後ろめたさの裏返しで、国民もマスコミも感情的な「絶対安全論」を唱えて、電力会社と政府のエネルギー政策を攻撃する。安全の確保を科学や技術からとらえる議論などは、ヒステリックな「絶対安全論」の前では無力だ。ちょっとした事故が、原発の新たな建設どころか、既存原発の存続さえ脅かしかねない。

国民の生活を支えるための技術論が素人の感情論でメチャメチャにされかねないとき、事故やトラブルを表に出すのを避け、隠蔽してしまいたいという誘惑にかられても不思議ではない。

だが、それは悪魔のささやきだ。いまや、日本の企業の特徴だった「一家意識」など、グローバルな競争社会の到来でほとんど崩壊してしまった。必ず「内部告発」がある、と考えなければならないのだ。

隠蔽が発覚した時のダメージは、事故やトラブルを即座に発表した時とは比べものにならない。電力会社の場合は、不二家やパロマなどと違って企業の存続が脅かされるわけではないが、それ以上に日本のエネルギー政策を根底から覆し、国民生活そのものを脅かすことになる可能性も出てくるのだ。

【原発の安全は情報共有から】

事故やトラブルが、他のジャンル以上に感情的な攻撃にさらされる原発は、隠蔽の誘惑にかられ易いが、だからこそ、どんなことでも公表して安全対策を国全体で考えていく必要がある。

現在進行している地球規模の環境破壊や温暖化現象を考えると、化石エネルギーの消費量を相当の速度で減らし、減少分を当面原発で補いつつ、地球上に降り注ぐ太陽エネルギーの範囲内で生活する循環型社会に段階的に移行する、というのが、人類が文明社会と地球環境とを今後千年以上のオーダーで共存させるためのほとんど唯一の解だと思う。

そのためには、現代社会の必要悪ともいべき原発を何とかして安全に飼いつけ、しばらくの間上手に利用していくため、冷静に科学的に議論することが必要だ。

今回明らかになった電力会社の隠蔽体質を批判することはたやすいが、そうなった原因をよく分析し、マスコミも、原発の事故やトラブルが発生した時、感情的な絶対安全論に振り回されることなく、国民全体で冷静に議論できる環境を作っていくなどの視点も必要だと思う。